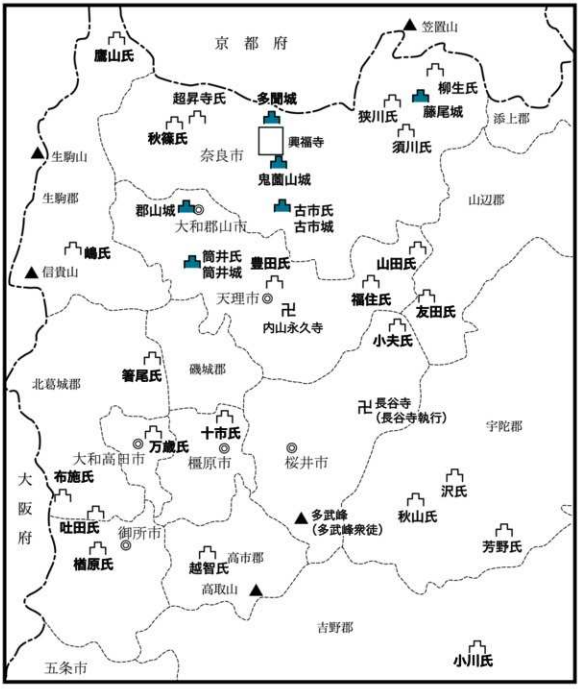
平成27年度　秋季特別展

近世奈良の開幕

－多聞城と郡山城－



衆徒・国民と城郭の分布

例　　言

1　この冊子は、平成 27 年 10 月 16 日～平成 27 年 12 月 28 日まで奈良市埋蔵文化財調査センターで開催する、平成 27 年度秋季特別展「近世奈良の開幕−多聞城と郡山城−」の解説パンフレットです。

2　掲載した写真は、奈良市埋蔵文化財調査センターが撮影したものと、佐藤右文が撮影した写真（5・9・13・14・17・21～24・27・29・32・37・38・41・43・45～49・52～56・58～60）、大和郡山市教育委員会（10.12.25.28.30）、小路谷写真株式会社（18）、奈良女子大学（33）から借用したものを使用しました。

3　掲載写真は展示品のすべてではありません。

4　本書の執筆は、森下惠介・中島和彦が行い、編集はセンター職員の協力のもとに中島が行いました。

5　今回の特別展の開催にあたっては、下記の機関並びに個人より、ご協力をいただきました。記して感謝の意を表します。

協力機関　大和郡山市教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館、国立大学法人奈良女子大学、奈良市立若草中学校

協 力 者　大賀克彦、川村婦美子、十文字健、鶴見泰寿、西山要一、服部伊久男、山川均、米田浩之

（順不同　敬称略）

古市氏と筒井氏—戦国時代の大和—

中世の大和は興福寺の支配下にあり、筒井、越智、十市、古市、箸尾など大和在地の武士たちに、興福寺は衆徒・国民という身分を与え、その配下に置いていました。南北朝の内乱を経て、興福寺の勢力は衰退し、こうした衆徒・国民らが台頭します。

大和北部の筒井氏、南部の越智氏を中心として国人たちの抗争が始まり、戦国時代の始まりとされる応仁の乱（1467 ～ 1477）では、筒井は東軍、越智は西軍に属し争います。京での合戦が終息した後も、京都や河内の勢力を巻き込み、大和国内の戦闘は恒常化し、各地に城が築かれ、環濠集落がつくられました。筒井順昭によって大和の統一が進められるものの、永禄２（1559）年には、京都を支配する三好長慶の家臣であった松永久秀が大和に乱入し、奈良は初めて本格的な武家支配をうけることになります。松永久秀は、多聞城を拠点に大和を支配し、永禄 10（1567）年には対立する三好三人衆（三好長逸・三好政康・岩成友通）との合戦で、東大寺大仏殿が焼失します。翌年の永禄 11（1568）年には織田信長が上洛し、元亀２（1571）年に信長に背いた松永を筒井順慶が辰市合戦で打ち破り、筒井順慶の大和一国の支配が信長に認められます。松永久秀は天正５（1577）年信貴山城に滅び、筒井順慶は筒井城から郡山城に居城を移し、豊臣政権下でも大和を保ちました。

衆徒（しゅと）と国民（こくみん）

大和の在地武士たちは興福寺の荘園の荘官を勤めるとともに、僧兵として下級僧侶に位置づけられ、僧形をとる衆徒と春日社の下級神官に位置づけられた俗人の国民がいます。衆徒は大和北部に多く筒井氏や古市氏などが、国民は大和中南部の越智氏、十市氏や箸尾氏などがその代表です。戦乱の中で、その武力は期待され、大和一国の興福寺の所領は、やがては彼らの支配するところとなってゆきます。

衆徒（一乗院方）**筒井**・龍田・山田・井戸・菅田・櫟原・高樋・六条・岸田・唐院・秋篠・鷹山・池田・幸前下司・木津執行

（大乗院方）**古市**・小泉・番条・丹後庄・鞆田・大安寺向・庵治辰巳・鳥見福西・萩別所・福智堂・長谷執行

国民（一乗院方）**越智**・布施・万歳・**箸尾**・高田・岡・片岡・金剛寺・佐味・嶋・簀川下司・超昇寺下司・鳥屋・子嶋

（大乗院方）**十市**・楢原・新賀・立野・倶志羅・出雲庄・吉備・柳本・南郷・小林・窪・牟山・深河・辰市堀・長谷川・糸井庄

古市氏と古市城

古市城は、奈良の南、西に延びる台地の縁辺にあり、「古城」が高円団地、中心部が推定される「上ノ段」が東市小学校となっており、その南に「新城」と伝える「城山」があります。

古市氏は興福寺大乗院方衆徒の中で最大の勢力を誇った国人で、古市澄胤は文明９（1477）年に越智家栄とともに筒井氏を駆逐し、大和守護代に相当する官符衆徒の棟梁となります。茶人村田珠光の弟子と伝え、茶湯、連歌、謡にも通じた風流大名として知られています。

東市小学校運動場南で堀跡、城山地区では中世墓地を壊して営まれた郭、堀、石造物を転用した石組溝、石室などが発掘調査で見つかっています。城下集落である古市町の集落は環濠集落で、江戸時代には藤堂藩の城和奉行所が置かれました。

1　古市城位置図

古市城山遺跡の発掘調査

城郭に関わる遺構として曲輪（くるわ）・堀が見つかっており、曲輪内には石造物を再利用した石組溝や石組土坑があります。

興味深いのは、曲輪の下から見つかった 101 基の中世墓です。墓は、すべて火葬骨を土師器羽釜（はがま）などの容器に入れて埋納されています。容器の外側には被葬者の没年月日などが墨書されており、14 世紀末から 16 世紀前半に墓地が営まれたことがわかります。地上には石仏や五輪塔が建てられています。中世墓の廃絶からみて、築城されたのは永禄年間（1558 ～ 1570 年）とみられます。

2　古市城山遺跡　中世墓（西から）

3　古市城山遺跡　平面図

古市城山遺跡出土の土器

中世墓の蔵骨器に使用された土師器羽釜の外面には「長享三年」「文明五年」の墨書があります。

青磁碗は 13 世紀頃のもので、長らく伝世して副葬されたものでしょうか。

土師器、瓦質（かしつ）土器は城郭築造後の堆積土出土で、城郭が機能していた頃のものです。

4　古市城山遺跡　石組溝（東から）

5　古市城山遺跡　出土土器・石造物　古市町

鬼薗山城の発掘調査

鬼薗山城は、現在の奈良ホテルの地にあり、南に隣接する興福寺大乗院の境内の一部に含まれます。越智方に前大乗院門主の安位寺経覚が組し、文安元（1444）年に陣屋が建てられました。翌２年には筒井方に攻められて落城。成身院光宣が筒井方の城として修復されますが、康正元（1455）年には、越智、古市方に攻められて落城。長禄２（1458）年に廃城となり、堀もことごとく埋められました。東側に続く西方院山城は文明11（1479）年に鬼薗山城に替わる古市方の市中陣所として築城されましたが、完成後、三日で筒井方に攻められ落城しました。永禄10（1567）年には松永久秀の多聞城を攻める三好、筒井方の陣所がこの大乗院山に置かれました。

6　鬼薗山城　発掘調査地全景（北から）

鬼薗山城の発掘調査

城郭が位置する丘陵先端部分で発掘調査を行っており、曲輪と考えられる平坦地が２箇所と堀切１つが、さらに丘陵裾部では堀が１つ見つかっています。丘陵裾部の堀は、幅約６ｍ、深さ約 1.7 ｍと大規模で、人為的に埋められており、堀の上層は多量の土師器皿で埋まっています。

下　7　鬼薗山城　堀全景（南東から）

右　8　鬼薗山城　平面図と発掘調査地

鬼薗山城堀出土の土器

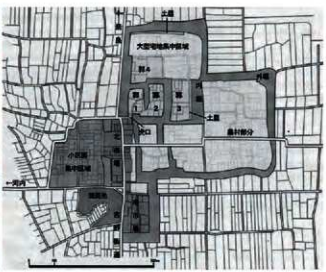
土師器皿には完形品があり、周辺で祭事に使用していたものが一括投棄されたものと考えられます。土師器皿や瓦質土器擂鉢の型式から、16 世紀初め頃のものと考えられ、長禄２（1458）年の廃城の時期とは合致しません。文献には残っていませんが、廃城後も堀を再利用したことも考えられ、市内の合戦で陣所として利用されたともみられます。

右　9　鬼薗山城　堀出土土器　高畑町

筒井氏と筒井城

筒井城は、興福寺一乗院方衆徒で、官符衆徒の棟梁という大和武士中随一の地位を維持した筒井氏の本城です。「シロ畠」と菅田比売神社付近に推定される筒井氏の居館（内郭）を中心に、南北の吉野街道、東西の竜田街道沿いの市町を取り込む外堀が巡らされています。永禄２（1559）年の松永久秀の大和入りで筒井城は攻め落とされ、筒井氏は「山の城」と呼ばれた椿尾上城（奈良市北椿尾町）に逃れ、松永方と対峙します。元亀２（1571）年に辰市合戦で松永方に勝利した筒井順慶は、居城として筒井城の改修を図ります。しかし天正８（1580）年に信長の大和一国諸城破却令によって筒井城は破却されることとなり、筒井順慶は郡山城に移ります。

10　筒井城　航空写真　大和郡山市教育委員会提供



11　筒井城　概要図（文献１から）

筒井城の発掘調査

大和郡山市による 16 次にわたる発掘調査が行われており、主郭を巡る内堀と主郭内に石組井戸などを検出しています。西側の内堀の調査では、幅 12 ～ 13 m、深さ約２ｍの大規模な堀が見つかり、人為的に埋め戻されたことが判明しています。堀内からは土師器皿が捨てられた状態で数多く出土し、堀を埋め戻す際に何らかの祭祀行為が行われたことが推定されます。

内堀埋め戻しの時期は、永禄２（1559）年の松永方の攻撃による落城と、天正８（1580）年の信長による大和一国諸城破却の時期と考えられます。

12　筒井城　内堀全景（北から　筒井城第５次調査）
大和郡山市教育委員会提供

筒井城出土の鉄砲玉

主郭側の堀の斜面から３点出土した鉛玉は、堀外から主郭に向かって撃ち込まれたと見られ、永禄２（1559）年の戦いで、松永方が発砲した弾丸と考えられます。
（大和郡山市教育委員会　所蔵）

13　鉄砲玉

文献１　山川　均・三宅和子・山下大輝　2014「筒井城出土の土器・陶磁器・瓦について」『織豊城郭　第 14 号』

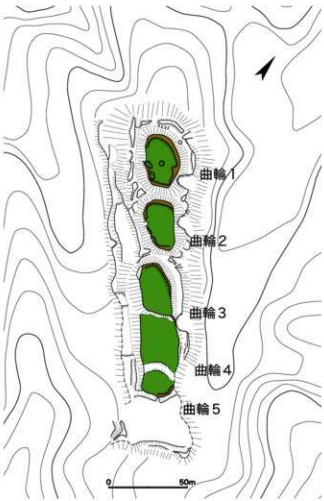
筒井城出土の土器

主郭南の内堀である第13次調査のＳＤ01からの出土土器は、堀底に置かれたように出土しており、内堀を埋め戻した時期を示しています。土師器の皿・羽釜の形態から、16世紀後半頃のものと推定され、天正８（1580）年の信長による大和一国諸城破却令による破城を知る資料と言えます。

14　筒井城　堀出土土器　筒井町　大和郡山市教育委員会所蔵

藤尾城の発掘調査

藤尾城は奈良市の東部山間地域にあり、狭川（さがわ）と阪原の両村落を結ぶ古道沿いの、低い尾根上に位置しています。尾根上に５つの曲輪が一列に並んでおり、南側の２つの曲輪を発掘調査しています。調査では曲輪を取り巻く堀と土塁などを検出しています。出土遺物は僅かで、城の機能していた時期も不明です。ただこの地に城が築かれる契機としては、筒井氏の東山内（さんない）進出時の天文12～13（1543～1544）年と、北和地区進出時の元亀２（1571）年～天正５（1577）年頃と考えられ、築城者は、筒井氏またはそれと敵対した在地の狭川氏が考えられています。



左上　15　藤尾城全景（南東から）
上　16　藤尾城縄張図
左　17　藤尾城出土土器　下狭川町

多聞城と郡山城の築城

松永久秀と多聞城

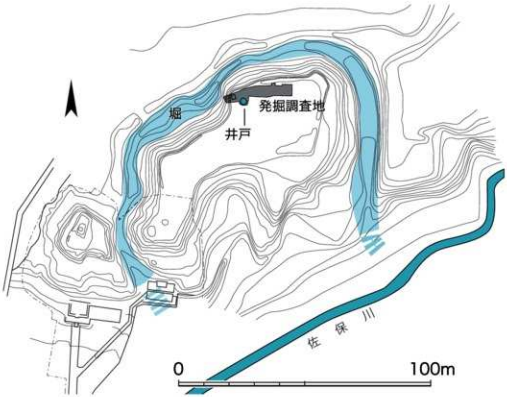
永禄２（1559）年の松永久秀の大和入りによって、社寺の都であった南都奈良は、初めて本格的な武家支配を受けることになりました。久秀はその翌年から町を見下ろす佐保山の東南に、多聞城の築城を開始します。城の名は久秀の信仰した信貴山毘沙門天（多聞天）に因むとされ、久秀はこの多聞城と信貴山城を拠点とすることで、京、奈良、堺を結ぶ交通路の掌握を図ったとみられます。永禄８（1565）年に奈良を訪れた宣教師、ルイス・デ・アルメイダは、瓦葺、白壁の建物、障壁画で飾られた城内などの多聞城の豪華さを絶賛しており、瓦葺・白壁といった近世城郭建築が、寺院建築技術をもつ奈良で最初に出現することがわかります。近世城郭の長屋状の櫓「多門（多聞）櫓」も多聞城が起源とされ、後の天守にも相当する「四階櫓」が存在したことも知られます。

18　多聞城航空写真（南東から　小路谷写真株式会社提供）

城跡は市立若草中学校の校地となっており、西側の光明皇后陵、聖武天皇陵も城内に含み、丘陵北面と東西には堀を巡らし、南面は山麓の江戸時代に奈良奉行所同心屋敷のあった多聞町が侍屋敷とみられ、佐保川によって画されています。

天正４（1576）年に多聞城は信長の命で取り壊され、殿舎は京都の二条殿に移されたとされています。

多聞城の発掘調査



19　多聞城略測図（文献２を再トレース）と奈良市昭和 53 年調査の発掘調査区

昭和 23（1948）年に行われた若草中学校建設工事の際に、伊達宗泰氏が行った調査が最初です。工事と並行の悪条件下でありましたが、工事前の多聞城の略側図、出土した蔵骨器や瓦類など貴重な資料が今に残されています。

昭和 53（1978）年に奈良市教育委員会が行った発掘調査では、城の北端部分で、井戸や石造物を転用した石組溝などが見つかりました。多数の瓦も出土し、多聞城使用の瓦の実態が明らかになりました。

その後も２度発掘調査が行われましたが、遺構は見つかりませんでした。

文献２　伊達宗泰　1958「多聞城跡」『奈良史跡名勝天然記念物調査抄報　第十輯』

右　20　多聞城発掘調査地全景（西から　奈良市昭和 53 年調査）

手前に石造物転用の石組溝が、右手には井戸があります。

多聞城出土の土器

多聞城築城以前の蔵骨器の土師器羽釜を除いて、調査ではまとまって土器は出土していません。土師器皿・瓦質土器擂鉢は 16 世紀頃のものですが、青磁碗は 13 ～ 14 世紀頃の伝世品の可能性があります。白磁皿は 16 ～ 17 世紀にかけて奈良では普通に出土する型式です。多聞城以前にあった寺院や墓地の遺物も含まれるようです。

左　21　多聞城出土土器　法蓮町

多聞城出土の瓦製建物

昭和 23 年の調査で、大変珍しい瓦製の建物が出土しています。伊達氏がブルドーザーの排土から拾い上げたもので、出土状況は全く不明です。2 点あり、屋根の勾配から平面長方形の建物と考えられ、建物の隅部分になります。粘土で作った箱を心として、その上に屋根を貼り付けて形作っています。軒下には蟇股（かえるまた）や垂木を、隅木下には邪鬼を彫るなど細部は非常に精巧に作られています。多聞城築城以前に当地にあった眉間（みけん）寺や西方寺、常徳寺、善鐘寺などの寺院に関わる遺物とみられます。

22　多聞城出土の瓦製建物　法蓮町　奈良県立橿原考古学研究所付属博物館所蔵

多聞城の瓦

多聞城出土の軒瓦

多聞城からは、軒丸瓦が10型式、軒平瓦が10型式出土しています。軒丸瓦は三つ巴紋、軒平瓦は唐草紋が主体です。瓦当紋様の検討から軒瓦には、多聞城築城時に製作されたものと、築城以前のものを再利用したものがあります。さらに前者の軒平瓦は、大和の瓦工（中央が3または5弁の花紋の唐草紋）と、堺の瓦工（中央が宝珠紋の唐草紋）によるものに分かれます。また京都の二条殿跡（京都市中京区）の発掘調査でも多聞城と同笵瓦が出土しており、多聞城廃城後に殿舎が瓦と共に同地に移築されたとの史料を裏付けています。

23　多聞城出土の軒丸瓦・軒平瓦　法蓮町

多聞城出土の隅軒平瓦と懸（かけ）軒丸瓦

隅軒平瓦は、入母屋造または寄棟造の屋根の四隅に用いる瓦で、建物の屋根構造の理解が無ければ製作出来ません。

懸軒丸瓦は、丸瓦の凹面に桟をつくる瓦で、これを受ける水返しを持った平瓦と組み合って葺かれます。丸瓦と平瓦のずれを防ぐ工夫の1つですが、桟と袖の設定に気を使わなければいけません。

いずれの瓦も瓦当紋様は多聞城築城時に製作されたグループに属しており、多聞城の瓦葺きが計画的に行われたことがうかがえます。

24　隅軒平瓦と懸軒丸瓦　法蓮町

郡山城の築城

古代の添下郡衙の存在も推定される郡山丘陵には、中、辰巳、戌亥、向井など郡山衆とよばれる武士団が館を構えていましたが、天正８（1580）年に郡山城を与えられた筒井順慶が、翌９年から築城工事を行いました。この筒井時代の城は、現在の郡山城の南方と推定されています。

天正 12（1584）年の筒井順慶の死後、筒井氏は伊賀に移され、天正 13（1585）年には豊臣秀長が郡山城に入城、大和、紀伊、和泉百万石居城として大規模な築城が行われ、大量の石造物を石垣に転用し、５層とされる天守もこの豊臣時代に造られたとみられます。秀長の死後、文禄４（1595）年に郡山城主となった増田長盛は、城下町を囲む外堀を完成させます。江戸時代には、水野、松平、本多などの譜代大名が入り、享保９（1724）年に甲府から柳沢吉里が封ぜられ、以後幕末まで大和一の大藩、柳沢十五万石の居城として続きました。

26　郡山城概略図（柳沢時代　文献３を一部改変）

天守台の発掘調査

天守台の発掘調査は、平成 26 年に大和郡山市教育委員会が行いました。天守台上面には東西南北に列ぶ礎石が良好に残存しており、天守規模が明らかになりました。天守は７× ８間の平面規模で、５階建て相当の建物であったこと推定され、また出土瓦から天守は、16 世紀末頃の豊臣政権期に建てられたことがわかりました。

25　郡山城全景（南から）　大和郡山市教育委員会提供

27　郡山城出土瓦　城内町　大和郡山市教育委員会所蔵
1．左三巴紋、2．九曜紋（松平忠明期？）
3．沢瀉紋（水野期）、4．立葵紋（本多期）、5．花菱紋（柳沢期）

右　28　郡山城天守台全景（南東から）
大和郡山市教育委員会提供

文献３　大和郡山市教育委員会　1993『追手東隅櫓・多聞櫓跡発掘調査報告書』

天守台出土の瓦

天守台出土の軒瓦と鯱瓦

天守に伴う軒丸瓦は左三つ巴紋で、同笵の瓦には豊臣期大坂城の金箔瓦があります。

軒平瓦は中心飾りが3弁の花文の均整唐草紋で、聚楽第に類例があります。また下向きの三葉紋を中心飾りとするものもあります。

この他、菊丸、鯱瓦があり、在りし日の天守を偲ばせます。

29　軒丸瓦・軒平瓦・鯱瓦　城内町
大和郡山市教育委員会所蔵

金箔瓦

天守台南の付櫓からは、金箔が残る菊丸瓦が出土しています。郡山城で金箔瓦の使用が確認されたのは初めてのことです。

30　金箔瓦　城内町
大和郡山市教育委員会提供

社寺と城—石垣と瓦—

正暦寺旧境内で見つかった石造物利用の石垣

正暦寺は奈良市南部の菩提山町にあり、古代の創建以来幾度も兵火をうけながらも今も法灯を守っています。

正暦寺の入口近くの発掘調査では、長さ18mにわたって石造物を利用した石垣が確認されました。方形の石造物のみ275基を利用して築かれており、寺院内にありながらも石造物の再利用を行っている点で、その思想的背景には興味深いものがあります。

31　石造物を利用した石垣　菩提山町

32　軒平瓦　菩提山町

正暦寺旧境内出土の軒瓦

多聞城または郡山城と同笵の軒平瓦が出土しています。中心飾りが上向きの三葉紋の均整唐草紋の軒平瓦で、いずれも凹面両側縁に水返しのつく形態です。郡山城・正暦寺のものは、軒両端を切り縮めた段階の笵型を使用しており、多聞城より新しいものとわかります。

中世から近世の町へ

戦国大名が覇権を争う下でも、人々の生活は続きました。興福寺の支配のもと中世以降発展を続けてきた奈良では、郷民による自治がすすみさらに各郷の横断的な組織の奈良惣郷へと発展してゆきました。天正 15（1587）年には豊臣秀長による郡山城下以外での商売禁止令が出され打撃をうけますが、やがて解禁されると再び活気をみせます。興福寺から幕府に支配者が代わる時代の奈良の町を、考古資料から追ってみます。

奈良奉行所の設置

江戸時代、幕府の直轄地（天領）のうち重要な場所には遠国奉行が置かれ、その土地の政務を取り扱いました。関ヶ原合戦後、徳川家康は大久保長安を大和代官として奈良を治めさせ、慶長 8（1603）年に方形の堀を巡らせた奉行所が建設され、慶長 18（1613）年に中坊秀政が奈良奉行として任じられます。

奉行所の跡地は現在の奈良女子大学で、東西 151 m、南北 144 m の敷地で、幅 11.5 ～ 17 m の堀が巡り、北側の堀の発掘調査では江戸時代初頭の陶磁器類が多く出土しています。

左　33　奈良奉行所発掘区全景　　中　34　肥前産陶器　　右　35　肥前産磁器　奈良女子大学所蔵

今小路町の発掘調査—中近世の町屋の調査例—

東大寺の西に隣接する今小路町の調査では、中世の東西道路を検出しました。道路は幅約 16 m と推定され、東大寺の西面中門である「焼門（やけもん）」へと通ずる古代の二条条間路が、そのまま踏襲されています。道路は 16 世紀の後半～末頃には埋まり、現在の幅約 5 m の東西道路となります。また遺構の配置から、中世には南に間口をもつ宅地が、この時に東側に間口をもつ宅地へと改変されたと推定できます。中世の道路側溝上に新たに築かれる井戸からは、17 世紀前半の肥前産陶器が出土しており、17 世紀初頭頃には、道路と宅地の改変が行われたことがわかります。

現在の奈良の町割の出現する時期が判明する貴重な調査例です。

左
36　発掘区全景（西から）
右上
37　中世道路側溝出土土器
右下
38　近世井戸出土土器
今小路町

元興寺の解体

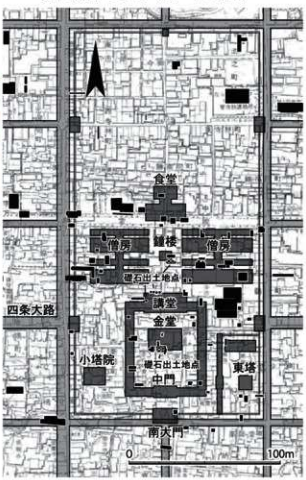
元興寺境内の発掘調査では、境内地が時代を経るごとに徐々に宅地化してゆく様子が明らかになってきています。食堂周辺の調査では、12 世紀後半頃には堂舎が失われ、遅くとも 14 世紀頃には宅地となることが、遺構の分布からわかります。

一方、講堂や鐘楼の調査では、穴を掘って礎石を落とし込む土坑が見つかっています。おそらく、宅地にする際に邪魔な礎石を処理したものと考えられ、穴から出土する土器から 17 世紀初頭の頃に行われたことがわかります。また西面回廊からもこの時期の蔵骨器が見つかっています。

境内の宅地化の時期は一様ではないものの、最後まで残った講堂・金堂が宅地化する 17 世紀初頭には、現在の町割りが成立するようです。

39・40　礎石落とし込み土坑
講堂（左）と鐘楼（右）　中新屋町

41・42　土師器羽釜蔵骨器（左）と出土状況（右）西新屋町



44　元興寺旧境内発掘調査地

43　礎石落とし込み土坑出土土器　中新屋町

瓦葺建物の普及

江戸時代の都市部では、火災対策の一環として瓦葺きが奨励されます。17 世紀後半に発明されたと伝えられる桟瓦は、屋根瓦の軽量化を実現させ、瓦葺きの普及に大きく寄与しました。

今小路町出土の両桟瓦は、18 世紀初頭のもので、丸瓦と平瓦を組み合わせた本瓦葺きから桟瓦葺きへの過渡期のものと考えられます。この時期以降、奈良でも桟瓦が普遍的に出土するようになります。

45　両桟瓦　今小路町

生産と消費

社寺の需要をまかなうため、奈良では古くから商工業が発展してきました。建築・造瓦など社寺建築に付随する技術は、伝授されつづけます。また商品経済の発展は各地の特産品を生み出し、奈良の酒の名声は広く知れ渡っています。この他火鉢や刀なども奈良の名産品として知られています。中世から近世にかけての奈良の商工業の一端を、発掘調査成果から紹介します。

金属生産

北室町の鉄製品生産

元興寺の食堂跡の調査では、17 世紀初頭の金属生産関連遺物が、井戸の中から土器と共に多数出土しています。内面に銅滓が付着する取瓶（とりべ）が 1 点ある他は、鞴羽口（ふいごはぐち）と鉄滓（てっさい）、砥石で、主に鉄製品を扱っていたことがわかります。17 世紀中頃には生産を終えるようですが、調査地の南約 200 m の西新屋町内では、江戸時代を通じて鍛冶等の金属生産を行っていたことがわかっています。

46　金属生産関連遺物　北室町

47・48　把手付坩堝（上）と蓋付き三足坩堝（下）　柳町

柳町の刀装具生産

奈良町遺跡でも縁辺部に位置する柳町の調査では、17 世紀の中頃の真鍮（しんちゅう）製品の生産跡が見つかっています。真鍮は銅と亜鉛の合金で、この合金を製作する際は蓋付きの特殊な形の坩堝（るつぼ）が使用されます。また真鍮を溶かすための把手付の坩堝も多数あります。さらに鍔（つば）・目貫（めぬき）などの鋳型が多数出土しており、真鍮製の刀装具を専門に製作していたことがわかります。鍔の鋳型は未使用のまま捨てられており、製作技術で知る上でも大変貴重なものです。

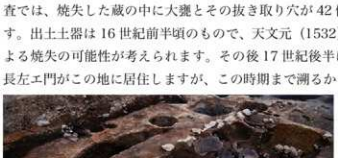
49　刀装具鋳型　柳町

酒造

一抱えもある多数の大甕を整然と列べ、地面に半ば埋め込んだ埋甕遺構が、日本各地の中世遺跡で見つかっています。大甕内には酒、油等の液体が蓄えられていたと考えられます。京都では文献に記された酒屋の居住地内で埋甕遺構が見つかっており、酒造に関わる遺構であることが判明しています。

埋甕遺構は、奈良町遺跡からも5例ほど調査例があります。椿井町の調査では、焼失した蔵の中に大甕とその抜き取り穴が42個見つかっています。出土土器は16世紀前半頃のもので、天文元（1532）年の一向一揆による焼失の可能性が考えられます。その後17世紀後半には造酒屋の菊屋長左エ門がこの地に居住しますが、この時期まで溯るかは不明です。

50　埋甕遺構出土陶器甕　椿井町



51　埋甕遺構（南西から）　椿井町

52　埋甕遺構出土土器　椿井町

製墨

松や油を燃やして得られた煤と膠を練り合わせて墨が作られます。奈良では油の煤を利用する油煙墨が室町時代頃から造られていることが文献からわかっています。油を入れた素焼きの皿で灯明を焚き、その上に環状の把手のついた素焼きの蓋をかぶせて、蓋裏に付着した煤を採取します。

この把手のついた蓋は、奈良では16世紀後半頃から出土しはじめます。それ以前は深い丸底のコップ形の土器で油煙を採取していたようで、奈良では14世紀中頃から出土します。奈良の油煙墨の起源はこの頃まで溯ることがわかります。

53　採煙用の土器　北室町ほか市内各所

土器作り

高畑町の発掘調査では、16世紀後半頃の土坑から一般の遺跡ではあまり見ない土師器皿がまとまって見つかっています。普通の土師器の皿は、口縁部を横方向にナデ調整し、やや深みのある皿形につくっていますが、ここでは口縁部のナデ調整が雑で、いびつな形や扁平な形のものが見られます。一般には使用しない特殊な用途、または製作過程の失敗品と考えられます。

54　土師器（左側が通常の品、右側が粗製品）　高畑町

貨幣経済の浸透

中世の貨幣経済は、中国から大量に輸入される渡来銭によって賄われていました。酒造で見た椿井町の埋甕遺構からは、渡来銭を束ねた緡銭（さしぜに）が出土しています。この緡銭は 103 枚で一緡になっています。

北室町の調査で出土した蛭藻金（ひるもきん）は、金を叩き延ばして作られており、下半部が切り取られていることから、秤量（しょうりょう）貨幣として利用されていたようです。

左上　55　永楽通宝　中院町
上　　56　緡銭　椿井町
左　　57　蛭藻金　北室町

輸入磁器から国産磁器へ

釉薬を掛けて高温で硬く焼き上げる磁器は、中国で 2 世紀頃から生産され、8 世紀頃には世界中に輸出されています。14 世紀の頃には白地に青色で文様を描く青花（染付）が作られ、現在の世界各地に名品優品が残されており、当時の日本の有力者も競ってこれを求めました。17 世紀前半に肥前で磁器の生産が開始されると、中国の磁器生産の衰退と重なったこともあり、日本国内はもとより世界中に流通し、「伊万里（いまり）焼」の名を知らしめました。

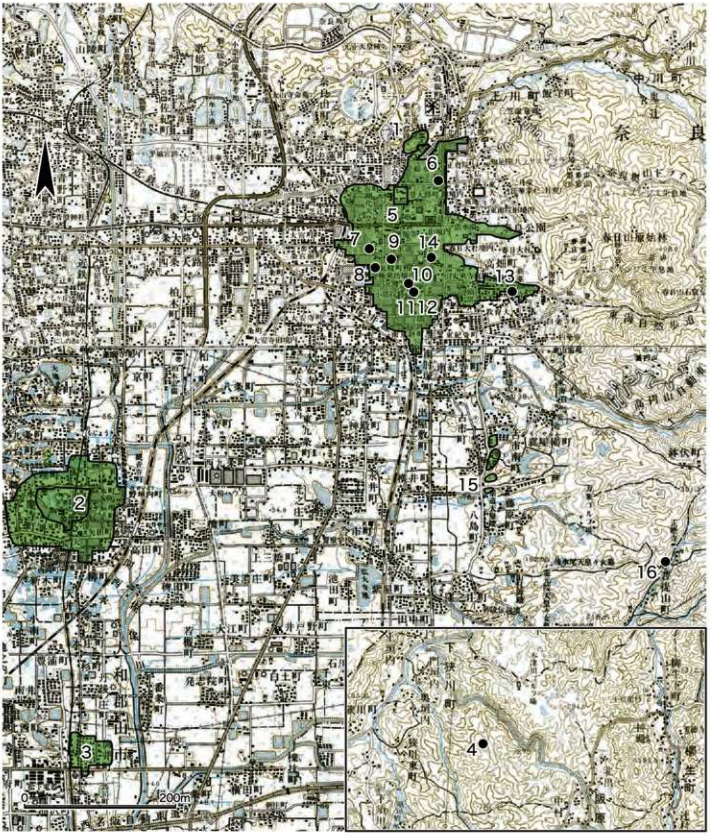
58　中国産磁器（青花）　下三条町

59　国産磁器（肥前産）　下三条町

塩の流通

素焼きの土器に粗塩（あらじお）を詰めて再度焼くと、にがりのとれた良質の塩になります。これをコップ形の容器に入れたまま販売したのが、泉州堺産の焼塩壷（やきしお）です。一種のブランド化で、贈答用の塩として用いられました。奈良でも江戸時代前半には出土しており、すでに、その販売網に入っているようです。下三条町の調査では、この時期の遺構から 4 点がまとまって出土しています。

右　60　焼塩壷　下三条町



展示品の出土した主な遺跡　1／50，000

番号	遺跡名	所在地
1	多聞城跡	法蓮町
2	郡山城跡	城内町
3	筒井城跡	筒井町
4	藤尾城跡	下狭川町
5	奈良奉行所跡	北魚屋西町
6	中近世奈良（今小路町）遺跡	今小路町
7	中近世奈良（下三条町）遺跡	下三条町
8	中近世奈良（柳町）遺跡	柳町
9	中近世奈良（椿井町）遺跡	椿井町
10	中近世奈良（北室町）遺跡	北室町
11	中近世奈良（西新屋町）遺跡	西新屋町
12	中近世奈良（中新屋町）遺跡	中新屋町
13	中近世奈良（高畑町）遺跡	高畑町
14	鬼園山城	高畑町
15	古市城跡	古市町
16	正暦寺旧境内	菩提山町

展示品目録

	写真番号	種類	器種	遺跡名	調査次数	出土地	年代	所蔵・保管
古市氏と筒井氏ー多聞城以前ー								
古市城の発掘調査	5	土師器	羽釜	古市城跡	ＦＪ第２次	古市町	１５Ｃ～１６Ｃ	
		石仏		古市城跡	ＦＪ第２次	古市町	１５Ｃ～１６Ｃ	
		土師器	皿	古市城跡	ＦＪ第２次	古市町	１５Ｃ～１６Ｃ	
		瓦質土器	擂鉢	古市城跡	ＦＪ第２次	古市町	１５Ｃ～１６Ｃ	
		瀬戸美濃産陶器	椀	古市城跡	ＦＪ第２次	古市町	１５Ｃ～１６Ｃ	
		青白磁	蓋	古市城跡	ＦＪ第２次	古市町	１５Ｃ～１６Ｃ	
		青磁	碗	古市城跡	ＦＪ第２次	古市町	１５Ｃ～１６Ｃ	
鬼薗山城の発掘調査	9	土師器	皿	鬼薗山城・元興寺旧境内	ＧＧ第４９次	高畑町	１６Ｃ前	
		信楽産陶器	擂鉢	鬼薗山城・元興寺旧境内	ＧＧ第４９次	高畑町	１６Ｃ前	
		瓦質土器	擂鉢	鬼薗山城・元興寺旧境内	ＧＧ第４９次	高畑町	１６Ｃ前	
		瓦質土器	浅鉢	鬼薗山城・元興寺旧境内	ＧＧ第４９次	高畑町	１６Ｃ前	
筒井城の発掘調査	14	土師器	皿	筒井城跡	筒井城第１３次	筒井町	１６Ｃ後	大和郡山市教育委員会
		土師器	羽釜	筒井城跡	筒井城第１３次	筒井町	１６Ｃ後	大和郡山市教育委員会
		瓦質土器	擂鉢	筒井城跡	筒井城第１３次	筒井町	１６Ｃ後	大和郡山市教育委員会
		瀬戸美濃産陶器	椀	筒井城跡	筒井城第１３次	筒井町	１６Ｃ後	大和郡山市教育委員会
		信楽産陶器	擂鉢	筒井城跡	筒井城第１３次	筒井町	１６Ｃ後	大和郡山市教育委員会
		青花磁器	碗	筒井城跡	筒井城第１３次	筒井町	１６Ｃ後	大和郡山市教育委員会
	13	鉄砲玉		筒井城跡	筒井城第８次	筒井町	１６Ｃ後	大和郡山市教育委員会
藤尾城の発掘調査	17	土師器	皿	藤尾城跡	ＦＯ第１次	下狭川町	１５Ｃ～１６Ｃ	
		土師器	羽釜	藤尾城跡	ＦＯ第１次	下狭川町	１５Ｃ～１６Ｃ	
		瓦質土器	擂鉢	藤尾城跡	ＦＯ第１次	下狭川町	１５Ｃ～１６Ｃ	
		瀬戸美濃産陶器	椀	藤尾城跡	ＦＯ第１次	下狭川町	１５Ｃ～１６Ｃ	
		信楽産陶器	擂鉢	藤尾城跡	ＦＯ第１次	下狭川町	１５Ｃ～１６Ｃ	
		青磁	碗	藤尾城跡	ＦＯ第１次	下狭川町	１５Ｃ～１６Ｃ	

	写真番号	種類	器種	遺跡名	調査次数	出土地	年代	所蔵・保管
多聞城と郡山城の築城								
多聞城の発掘調査	21	土師器	皿	多聞城跡	多聞城第１次	法蓮町	１６Ｃ後	
		瓦質土器	擂鉢	多聞城跡	多聞城第１次	法蓮町	１６Ｃ後	
		瓦質土器	深鉢	多聞城跡	多聞城第１次	法蓮町	１６Ｃ後	
		信楽産陶器	擂鉢	多聞城跡	多聞城第１次	法蓮町	１６Ｃ後	
		瀬戸美濃産陶器	丸皿	多聞城跡	多聞城第１次	法蓮町	１６Ｃ後	
		青磁	碗	多聞城跡	多聞城第１次	法蓮町	１６Ｃ後	
		白磁	皿	多聞城跡	多聞城第１次	法蓮町	１６Ｃ後	
	22	瓦製建物		多聞城跡	奈良県昭和３３年調査	法蓮町		奈良県立橿原考古学研究所付属博物館
	23	軒丸瓦		多聞城跡	多聞城第１次	法蓮町	１６Ｃ後	
		軒平瓦		多聞城跡	多聞城第１次	法蓮町	１６Ｃ後	
	24	懸（軒丸）瓦		多聞城跡	多聞城第１次	法蓮町	１６Ｃ後	
		隅軒平瓦		多聞城跡	多聞城第１次	法蓮町	１６Ｃ後	
	表紙	丸瓦		多聞城跡	多聞城第１次	法蓮町	１６Ｃ後	
		平瓦		多聞城跡	多聞城第１次	法蓮町	１６Ｃ後	
郡山城の築城	27	軒丸瓦		郡山城追手東隅櫓	郡山城第７次	城内町	１７Ｃ前	大和郡山市教育委員会
		道具瓦		郡山城追手東隅櫓	郡山城第７次	城内町	１７Ｃ～１８Ｃ	大和郡山市教育委員会
		軒丸瓦		郡山城追手東隅櫓	郡山城第７次	城内町	１７Ｃ前	大和郡山市教育委員会
		軒丸瓦		郡山城追手東隅櫓	郡山城第７次	城内町	１８Ｃ～１９Ｃ	大和郡山市教育委員会
		軒丸瓦		郡山城追手東隅櫓	郡山城第７次	城内町	１６Ｃ末	大和郡山市教育委員会
天守台出土の瓦	29	軒丸瓦		郡山城天守台	郡山城第７２次	城内町	１６Ｃ後	大和郡山市教育委員会
		軒平瓦		郡山城天守台	郡山城第７２次	城内町	１６Ｃ後	大和郡山市教育委員会
		鯱瓦		郡山城天守台	郡山城第７２次	城内町	１６Ｃ後	大和郡山市教育委員会
社寺と城								
社寺と城	32	軒平瓦		正暦寺旧境内	ＳＬ第１・２次	菩提山町	１６Ｃ後	
中世から近世の町へ								
奈良奉行所の設置	34	肥前産陶器	椀・皿	奈良奉行所跡		北魚屋西町	１７Ｃ前	国立大学法人奈良女子大学
	35	肥前産磁器	椀・皿	奈良奉行所跡		北魚屋西町	１７Ｃ前	国立大学法人奈良女子大学

	写真番号	種類	器種	遺跡名	調査次数	出土地	年代	所蔵・保管
今小路町の発掘調査	37・38	土師器	皿	中近世奈良遺跡	HJ 第６０５次	今小路町	１６Ｃ後～１７Ｃ前	
			羽釜	中近世奈良遺跡	HJ 第６０５次	今小路町	１６Ｃ後～１７Ｃ前	
		瓦質土器	擂鉢	中近世奈良遺跡	HJ 第６０５次	今小路町	１６Ｃ後～１７Ｃ前	
			火消壺	中近世奈良遺跡	HJ 第６０５次	今小路町	１６Ｃ後～１７Ｃ前	
		瀬戸美濃産陶器	椀	中近世奈良遺跡	HJ 第６０５次	今小路町	１６Ｃ後～１７Ｃ前	
		信楽産陶器	擂鉢	中近世奈良遺跡	HJ 第６０５次	今小路町	１６Ｃ後～１７Ｃ前	
		肥前産陶器	椀	中近世奈良遺跡	HJ 第６０５次	今小路町	１６Ｃ後～１７Ｃ前	
		肥前産陶器	皿	中近世奈良遺跡	HJ 第６０５次	今小路町	１６Ｃ後～１７Ｃ前	
		青花磁器	皿	中近世奈良遺跡	HJ 第６０５次	今小路町	１６Ｃ後～１７Ｃ前	
元興寺の解体	41	土師器	羽釜	元興寺旧境内・中近世奈良遺跡	ＧＧ 第４５次	西新屋町	１６Ｃ末～１７Ｃ前	
	43		皿	元興寺旧境内・中近世奈良遺跡	ＧＧ 第４７次	中新屋町	１６Ｃ末～１７Ｃ前	
			羽釜	元興寺旧境内・中近世奈良遺跡	ＧＧ 第４７次	中新屋町	１６Ｃ末～１７Ｃ前	
		瀬戸美濃産陶器	椀	元興寺旧境内・中近世奈良遺跡	ＧＧ 第４７次	中新屋町	１６Ｃ末～１７Ｃ前	
			皿	元興寺旧境内・中近世奈良遺跡	ＧＧ 第４７次	中新屋町	１６Ｃ末～１７Ｃ前	
		信楽産陶器	擂鉢	元興寺旧境内・中近世奈良遺跡	ＧＧ 第４７次	中新屋町	１６Ｃ末～１７Ｃ前	
		肥前産陶器	椀	元興寺旧境内・中近世奈良遺跡	ＧＧ 第４７次	中新屋町	１６Ｃ末～１７Ｃ前	
		備前産陶器	鉢	元興寺旧境内・中近世奈良遺跡	ＧＧ 第４７次	中新屋町	１６Ｃ末～１７Ｃ前	
		青花磁器	皿	元興寺旧境内・中近世奈良遺跡	ＧＧ 第４７次	中新屋町	１６Ｃ末～１７Ｃ前	
瓦葺建物の普及	45	両桟瓦		中近世奈良遺跡	HJ 第６０５次	今小路町	１８Ｃ初	
生産と消費								
金属生産	46	坩堝（椀形）		元興寺旧境内・中近世奈良遺跡	ＧＧ 第４８次	北室町	１７Ｃ初	
		鞴羽口		元興寺旧境内・中近世奈良遺跡	ＧＧ 第４８次	北室町	１７Ｃ初	
		鉄滓		元興寺旧境内・中近世奈良遺跡	ＧＧ 第４８次	北室町	１７Ｃ初	
		砥石		元興寺旧境内・中近世奈良遺跡	ＧＧ 第４８次	北室町	１７Ｃ初	
	49	鋳型		中近世奈良遺跡	ＨＪ 第６８８次	柳町	１７Ｃ中	
	47	坩堝（把手付）		中近世奈良遺跡	ＨＪ 第６８８次	柳町	１７Ｃ中	
	48	坩堝（三足付）		中近世奈良遺跡	ＨＪ 第６８８次	柳町	１７Ｃ中	

	写真番号	種類	器種	遺跡名	調査次数	出土地	年代	所蔵・保管
金属生産		坩堝（椀形）		中近世奈良遺跡	ＨＪ第６８８次	柳町	１７Ｃ中	
		炉壁		中近世奈良遺跡	ＨＪ第６８８次	柳町	１７Ｃ中	
		鞴羽口		中近世奈良遺跡	ＨＪ第６８８次	柳町	１７Ｃ中	
		砥石		中近世奈良遺跡	ＨＪ第６８８次	柳町	１７Ｃ中	
酒造	50	備前産陶器	甕	中近世奈良遺跡	ＨＪ第４８２次	椿井町	１６Ｃ前	
	52	土師器	皿	中近世奈良遺跡	ＨＪ第４８２次	椿井町	１６Ｃ前	
			羽釜	中近世奈良遺跡	ＨＪ第４８２次	椿井町	１６Ｃ前	
		瓦質土器	擂鉢	中近世奈良遺跡	ＨＪ第４８２次	椿井町	１６Ｃ前	
		信楽産陶器	擂鉢	中近世奈良遺跡	ＨＪ第４８２次	椿井町	１６Ｃ前	
		備前産陶器	壺	中近世奈良遺跡	ＨＪ第４８２次	椿井町	１６Ｃ前	
		青花磁器	皿	中近世奈良遺跡	ＨＪ第４８２次	椿井町	１６Ｃ前	
		白磁	皿	中近世奈良遺跡	ＨＪ第４８２次	椿井町	１６Ｃ前	
油煙墨生産	53	製墨土器		元興寺旧境内・中近世奈良遺跡	ＧＧ第３８次他	北室町他	１５Ｃ中～１９Ｃ中	
土器生産	54	土師器	皿	中近世奈良遺跡	ＳＹ第２次	高畑町	１６Ｃ後	
貨幣経済の浸透	55	銅銭		元興寺旧境内・中近世奈良遺跡	ＧＧ第１３次	中院町	１６Ｃ	
	57	蛭藻金		元興寺旧境内・中近世奈良遺跡	ＧＧ第４８次	北室町	１６Ｃ後	
	56	緡銭		中近世奈良遺跡	ＨＪ第４８２次	椿井町	１６Ｃ前	
輸入磁器から国産磁器へ	58	青花磁器	皿・碗	中近世奈良遺跡	HJ第６５１次	下三条町他	１７Ｃ前	
	59	肥前産磁器	皿・碗	中近世奈良遺跡	HJ第６５１次	下三条町他	１７Ｃ前	
塩の流通	60	焼塩壺		中近世奈良遺跡	HJ第６５１次	下三条町他	１７Ｃ前	

平成 27 年度　秋季特別展
近世奈良の開幕―多聞城と郡山城―

平成 27 年 10 月 15 日発行

編集　奈良市埋蔵文化財調査センター

発行　奈良市教育委員会

関係年表

観応2	1351	興福寺一乗院と大乗院との合戦（観応の確執）により、衆徒・国民が力をもつ。
（正平6）		
明徳3	1392	南北朝合一
（元中9）		
応永21	1414	大和の衆徒26人、国民27人が幕府に召喚され、私闘停止が命じられる。
正長元	1428	正長の土一揆が起る。「正長元年柳生徳政碑」
永享2	1430	越智氏と筒井氏を中心に大和国中を巻き込んだ南北合戦（大和永享の乱）が始まる。
嘉吉元	1441	将軍足利義教が赤松満祐に殺される（嘉吉の乱）。
文安2	1445	筒井順永が奈良鬼薗山城の古市氏、豊田氏を攻め、官符衆徒に復する。
宝徳3	1451	土一揆によって元興寺や大乗院が焼失する。
寛正6	1465	足利義政、春日社参詣し、正倉院の香木、蘭奢待を切る。
応仁元	1467	応仁の乱が起り、筒井順永が東軍、越智家栄が西軍に属する。
文明10	1478	古市澄胤が官符衆徒となる。
明応6	1497	筒井順盛が越智、古市に勝ち、国中へ復帰する。 （大和国内の戦闘が恒常化し、各地に城や環濠集落がつくられる。）
明応8	1499	越智家栄が筒井、十市らの大和国衆と和睦する。 古市澄胤が細川政元の部将、赤沢朝経（沢蔵軒宗益）軍を大和に引き入れる。
永正元	1504	筒井順賢ら大和国衆、古市澄胤を破り、奈良を掌握する。
永正2	1505	筒井、越智、布施、箸尾、十市らが和睦し、一揆を結ぶ（永正の国人一揆）。
永正3	1506	細川政元、大和国衆の討伐を命じ、赤沢朝経が大和へ進軍する。
永正17	1520	筒井、越智が和睦し、筒井順興が官符衆徒に就く。
大永元	1521	筒井順興、古市山城（鉢伏城）の古市公胤を攻める
大永4	1524	柳生家厳、古市氏、贄川（須川）氏とともに筒井方の狭川氏を攻める。
享禄元	1528	越智方の超昇寺氏と筒井方の秋篠氏との合戦で薬師寺が焼失。 細川高国の部将、柳本賢治が大和に侵入、筒井順興、福住に逃れる。
天文元	1532	奈良で一向一揆（大和天文一揆）が蜂起し、興福寺菩提院を焼く。
天文6	1537	河内守護代の木沢長政、筒井と結び、越智氏討伐のため、大和に入る。 （以後、天文11年まで大和を支配）
天文13	1544	筒井順昭、柳生を攻める。
天文16	1547	筒井順昭が大和をほぼ平定する。（天文19年に急死）
永禄2	1559	松永久秀が大和に乱入。「筒井平城」が落城し、筒井藤勝（順慶）は「山ノ城」に逃れる。
永禄3	1560	この頃、松永久秀が多聞城を築き、これを本拠とする。
永禄8	1565	ルイス・デ・アルメイダ、奈良を訪れる。
永禄10	1567	松永久秀、三好三人衆を東大寺に攻め、これを破る。大仏殿焼失。
永禄11	1568	松永久秀、上洛した織田信長に大和支配を認められる。
元亀2	1571	筒井順慶、辰市合戦で松永軍に大勝し、筒井城を回復する。
天正元	1573	織田信長、足利義昭を追放、室町幕府亡ぶ。 松永久秀、多聞城を織田信長に明け渡す。
天正2	1574	織田信長、奈良に下向し、正倉院の香木、蘭奢待を切る。
天正4	1576	筒井順慶、信長から大和一国の支配を任される。 多聞城の破却が始まる。（天正5年に四階櫓壊す）
天正5	1577	松永久秀、信長に背き、織田勢に信貴山城を攻められ、自害する。
天正7	1579	筒井へ多聞山の石を運ぶ。
天正8	1580	郡山城だけを残し、筒井城を含めた大和諸城が破却される。 筒井順慶、郡山城に入る。
天正10	1582	京都本能寺で織田信長が明智光秀に討たれる。（本能寺の変） 筒井順慶、羽柴秀吉に応じ、大和一国支配を安堵される。
天正13	1585	筒井定次、秀吉から伊賀への国替を命じられ、羽柴秀長が郡山城に入る。
文禄4	1595	増田長盛、郡山城主となる。
慶長5	1600	関ヶ原の合戦
慶長8	1603	徳川家康、江戸幕府を開く。奈良奉行所が作られる。
慶長18	1613	中坊秀政、奈良奉行となる。
慶長20	1615	大坂夏の陣で豊臣氏亡ぶ。水野勝成、郡山藩主となる。
（元和元）		織田信雄、宇陀松山城主となる。
元和5	1619	松平忠明、郡山藩主となる。
寛永16	1639	本多政勝、郡山藩主となる。
寛永17	1640	植村家政、高取藩主となる。
寛文12	1672	春日神鹿の角伐り始まる。
延宝5	1677	伊勢藤堂藩、古市に奉行所を設ける。
延宝7	1679	松平信之、郡山藩主となる。
貞享2	1685	本多忠平、郡山藩主となる。
元禄5	1692	東大寺大仏開眼供養
享保9	1724	柳沢吉里、郡山藩主となる。

開催期間　2015年10月16日～12月28日

奈良市埋蔵文化財調査センター
ARCHAEOLOGICAL RESEARCH CENTER , NARA CITY